

在日中国人留学生における「面子」再構築の社会学 ：「他者評価」中心から「自己受容」中心への段階 的変容プロセスの解明に着目して

劉，梓晨
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻

<https://doi.org/10.15017/7429602>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 30, pp.27-46, 2025-09-15. Seminar of Educational Planning, Measurement, Evaluation, Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



在日中国人留学生における「面子」再構築の社会学

—「他者評価」中心から「自己受容」中心への段階的変容プロセスの解明に着目して—

Sociology of the Reconstruction of “Face” among Chinese International Students in Japan: Focusing on the Gradual Transformation Process from “Others’ Evaluation” to “Self-Acceptance”

劉 梓晨

1. 問題の所在：なぜ文化変容の文脈で「面子」問題に注目するのか？

「面子」とは、文字通りの意味では人の「顔」を指すが、名誉や地位を示す概念として用いられている。黄光国（1987）が指摘したように、面子とは個人が社会で何らかの成果を上げることによって得られる社会的地位や声望を指す（黄, 2010, p.21）。

中国人の「面子」に関する議論は、19世紀末に異文化との接触が進む中で西洋人の関心を集め始めた。アメリカの宣教師である Smith（1894）は、「面子」という言葉自体が中国人の多くの重要な特徴を解く鍵になると指摘した（Smith, 1894, p.7）。また、中国の学者による「面子」についての言及も見られる。魯迅（1934）は「面子」を「中国精神の綱領」と評した（魯, 1934, p.130）。林語堂（1935）は、「面子、運命、恩」を中国を支配する「三つの女神」とし（林, 1935, p.199）、中国人は「面子」のために生きていると主張している（林, 1935, p.204）。

以上のように、「面子」は中国人の日常生活において極めて重要な役割を果たしているというのは言うまでもない。そのため、「面子」の文化が深く根付いている中国社会においては、中国人が自国の文化的環境に生まれながらに浸っているからこそ、自らの心理的・行動的様式を意識しない可能性が高いと言えよう。

しかし、中国人が自国以外の国に移動した際、彼らの「面子」に対する意識とその行動が時間とともにどのように変化するのかは、深く探求する価値のある問題である。Gullahorn ら（1963）は、移住者は元の社会で身につけた価値観や役割期待をもとに行動するが、新しい社会システムではその予測や期待が通用しなくなる可能性を指摘している（Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E., 1963, p.34）。

こうした背景から、このプロセスにおいて中国人の「面子」に対する意識や実践がどのように変化するかを検討する意義が見えてくる。すなわち、自文化の要素で

ある「面子」が、異文化という新たな環境の中でいかに外部と衝突し、そのプロセスでいかに再構築されていくのかを明らかにすることは、移住者の文化変容の実態を理解する上で重要な視点となる。逆に言えば、「面子」を文化変容の視角から理解しなければ、移動前—移動初期—中期以降にわたる段階的変化の全体像を捉えることは困難である。すなわち、「面子」を静的な文化性格として誤認し、異なる状況で脅威—対処—再解釈を経て生じる再構築を見落とすことになる。

したがって、文化変容の文脈において「面子」がいかに変容し、その変容の実態がどのようなものであるのか、さらに「面子」のどの側面が変わり、どの側面が変わらないのか、そして全体としてどのような趨勢が見られるのかという課題が浮かび上がってくる。

2. 先行研究の整理

2.1 文化変容の研究：Berry 文化変容理論を中心に

文化変容の定義については、異なる文化を持つ集団が直接的かつ継続的に接触することで、いずれか、または双方の集団の元々の文化的なパターンに変化が生じる現象を指す（Redfield, Linton, & Herskovits, 1936, p.149）。文化変容はもともと集団レベルの現象として研究されてきたが、現在では個人レベルの現象としても広く認識されており、「心理的文化変容」（Graves, 1967, p.337）と呼ばれている（Berry, 1992, p.70）。集団的レベルと個人的レベルにおける文化変容研究の枠組みは図1で示されている。個人的レベルでは、心理的文化変容は「行動の変化」と「文化変容ストレス」に分類され（Berry, 1992, pp.69-71）、また、文化変容の最終的な結果である適応には主に「心理的適応」と「社会文化的適応」の2種類がある（Berry, 1992, p.77）。

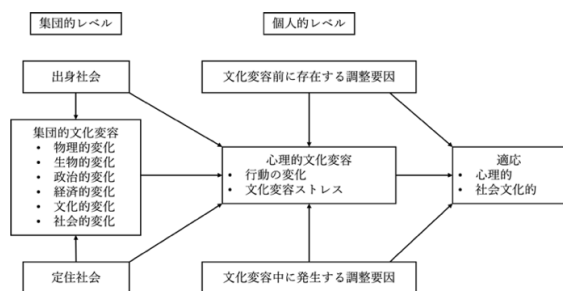


図 1 文化変容研究の枠組み

出典：Berry, J.W., 1992, Acculturation and adaptation in a new society, *International migration*, 30, p.81. より引用（筆者訳）

また、文化変容の研究で注目されているのは、Berry が提唱した文化変容モデルである。このモデルでは、文化変容は変容者の態度、すなわち「文化的アイデンティティや特徴を維持することに価値があるか」と「他のグループとの関係を維持することに価値があるか」という2つの質問への回答に基づいて、「統合 (integration)」「分離 (separation)」「同化 (assimilation)」「周辺化 (marginalization)」の4つのタイプに分類される (Berry, 1997, p.9)。この2つの質問に対する選択は、Berry が定義する4つの「文化変容ストラテジー」、すなわち「同化」、「統合」、「分離」、「周辺化」にもつながる。以下の図2に示す通りである。

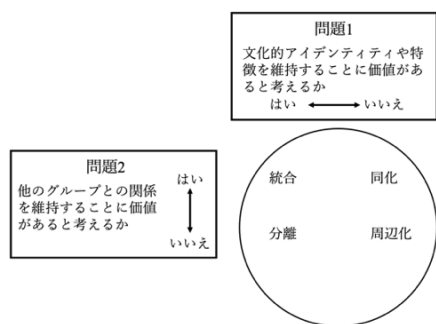


図 2 2次元による文化変容モデル

出典：Berry, J. W., 1997, Immigration, acculturation, and adaptation, *Applied psychology*, 46(1), p.10. より引用（筆者訳）

前述のように、個人が他文化に移動すると、「心理的文化変容」を経験し、「行動の変化」と「文化変容ストレス」という2つの変化が生じる。「行動の変化」は、新しい文化を学ぶという行為と、元の文化の特徴を放棄するという2つの異なる現象からなり、これら2つのプロセスには衝突が生じることもある (Berry, 1992, pp.73-74)。「行動の変化」には、「文化の学習」(Cultural Learning)、「文化の放棄」(Culture Shedding)、「文化の

衝突」(Culture Conflict) という3つの部分があるとされている (Berry, 1992, p.83)。「行動の変化」に伴い「文化変容ストレス」が発生する。文化変容のプロセスにおけるストレスには、変容者に心理的・身体的な健康問題を引き起こす否定的な側面と、変容者に新たな機会をもたらす積極的な側面の両方があるとされている (Berry, 2005, p.708)。

文化変容の最終的な結果は「適応」となる。「適応」(adaption) とは、個人や集団が外部の要求に対処するために生じる比較的安定した変化を指す (Berry, 2003, p.32)。具体的には、Berry (1997) は、「多くの変容者にとって一定期間が経つと新しい文化にある程度の適応が見られることが一般的であるが、その適応は様々な要因によって多様な形を取ることがある」と述べ、同化や統合のストラテジーを採用し、主流社会が変容者に対して受容的な態度を示す場合、「適合度」が高まることあるのに対し、分離や周辺化の状況にある場合、適合が達成されず、集団が対立モードに陥り、文化変容ストレスや心理的な問題が引き起こされることもあると指摘している (Berry, 1997, p.299)。このように、適応は必ずしも好ましい結果を意味せずに、正の結果にも負の結果にもなり得る (Berry, 2003, p.32)。また、適応は「心理的適応」(Psychological Adaptation) と「社会文化的適応」

(Sociocultural Adaptation) という二つの側面があり、心理的適応は主に個人の心理的・身体的健康に関わり、社会文化的適応は新しい文化環境において日常生活を管理する能力を指す (Berry, 2005, p.709)。

日本の学界においても、Berry の文化変容理論に基づく実証研究がいくつか見られている。例えば、井上・伊藤 (1997) は、留学生の来日1年目における文化変容態度と精神的健康との関連を、3時点で調査し、統合的態度が精神的健康に最も良い影響を与えることを示した

(井上・伊藤, 1997, pp.298-304)。また、趙・田中

(2020) は在日中国人高度外国人材9名を対象に、文化変容ストラテジーと二文化への態度を分析し、職場と私生活で日本文化と中国文化を使い分けていることを明らかにした (趙・田中, 2020, pp.51-52)。中本 (2021) は、日本企業に就職した東・東南アジア出身の元留学生4名を対象に、自己実現度と日本社会の異文化受容力を追跡し、職務上の自己効力感が社会的受容の重要要素であり、メンターの存在が自己実現に寄与することを示した (中本, 2021, pp.23-34)。

しかし、これらの実証研究では Berry 理論が単純化されがちであり、文化変容を「統合」「同化」など明確なカテゴリーに分ける一方で、プロセスの複合的側面が十

分に考慮されていない。また、これらの先行研究では「統合」戦略が理想視される傾向が強い。しかし、「統合」が本当に最善の文化変容形態であるかは、さらなる検討が必要である。

Berry (1997) は、同化や統合戦略と主流社会の受容的態度の組み合わせで「適合度」が高まる一方、分離や周辺化の場合は適合が難しく、ストレスや心理的問題が生じやすいと指摘する (Berry, 1997, p.299)。しかし筆者は、(1)同化・統合戦略の選択が本当に「適応」を意味するのか、(2)主流社会からの受容だけでなく「自己受容」の観点も重要ではないか、(3)分離や周辺化が必ずしも否定的とは限らず、その選択を一概にネガティブに評価できるか、という3点の課題を指摘したい。

さらに、従来の研究は主に文化変容態度や戦略に焦点を当てているが、出身文化の個別要素が文化変容プロセスでどう変化するかを単独で分析した研究はほとんど見当たらない。

2.2 中華文化の一要素としての「面子」をめぐる理論的整理

以上の文化変容研究の限界として、文化変容研究の枠組みに立脚しつつ、出身文化における個別の重要な要素に着目してその変容を分析した研究はほとんど見られない。「面子」は文化変容研究の枠組みにおける出身文化の一要素として位置づけられることから、ここでは「面子」について理論的に整理しておきたい。中華圏の学者たちは「面子」を特有の文化現象として捉え、1940年代から中国の学術界では深く本土化研究が進められている。

中国における「面子」概念を最初に学術的に考察した胡先晋 (1944) は、「面」と「臉」という2つの言葉で中国人の面子意識を区別した。「面」は人生の成功や自慢、そして地位向上を重ねることで得られる名声であり、個人の努力や知恵によって築かれた名誉を指し、外部の評価に依存する。一方、「臉」は道徳的評判に基づく社会的信頼を意味し、誠実さを守ることが重視される (胡, 1944, p.1)。胡は、「臉」を失うと社会から孤立し「面」を維持できなくなると述べている (胡, 1944, p.14)。このように、「臉」は「面」の基盤であり、両者は相互に関連しながらも異なる基準に属していることが示されている。

金耀基 (1988) は胡 (1944) の理論を基に、「面子」を「社会的面子」(社会から与えられる承認)と「道徳的面子」(道徳的品格に基づく集団の尊敬)に分類した

(金, 1988, pp.51-58)。これにより、面子の社会的側面と道徳的側面がより明確になった。しかし、初期の面子理論研究は、儒教文化の深い影響を受けたためか、面子と個人の道徳との関係を過度に強調しており、道徳を立身の基盤とする点では中華文化の特性に合致しているものの、不可避免的に「臉面」の範囲を限定してしまう側面があると言えよう。一方、陳之昭 (1988) は「面子」を、他者からの評価に基づく社会的かつ状況依存的な自己イメージと定義し (陳, 1988, p.110)、重要他者の存在や個人の価値観が面子意識に大きく影響すると指摘した (陳, 1988, p.111)。ただし、陳は「臉」と「面子」を明確に区別していない点が批判されている (翟, 2010, p.77)。また、周美伶・何有暉 (1992) は、面子を「他者から得られる社会的尊厳」や「公共的イメージ」と定義し、面子の主観的側面と客観的側面の両義性を強調している (周、何, 1992, p.203)。

翟学偉 (1995, 2010) は、面子研究において個人的側面と社会的側面の区別を踏襲しつつ、胡 (1944) のように道徳の有無で「臉面」を区別する方法には限界があると指摘している (翟, 1995, p.219)。「臉」と「面子」は道徳と関係する場合もあれば、しない場合もあり、道徳の有無をもって「臉面」を区別するのは現実に即していないとした (翟, 2010, p.73)。翟もまた、陳 (1988) と周、何 (1992) の面子定義について、自分の定義と共通点を有していると評価しているものの、もし陳 (1988) の定義を「臉」の定義とし、周、何 (1992) の定義を「面子」の定義と位置づけるならば、「臉面」の含意をよりの確に捉えるうえで重要な意義を持つと主張している (翟, 2010, p.77)。

翟は、「臉」を他者の期待に応える個人イメージ、「面子」を他者評価と自己期待の一致を判断する心理的プロセスとその結果と定義している (翟, 2010, pp.92-93)。また、儒家文化と現実文化のギャップから、中国人は「臉」よりも「面子」を重視する傾向が強まり、「臉面」は同質性から異質性へと変化していると述べている (翟, 1995, p.225)。つまり、「臉」と「面子」は必ずしも一致せず、面子の連続的な基準として中国社会の中で多様化していることが明らかになった。

異文化文脈での面子研究について、例えば末田 (1993, 1998) は、中国人と日本人の「面子 (フェイス)」概念の違いや、それがコミュニケーションに与える影響、中国人学生と日本人学生の間における「面子」の認識と面子を保つためのコミュニケーション・戦略の違いなどを研究している。しかし、末田の研究は想定された状況に対するアンケートで行われているた

め、回答者の実体験に基づいたものとは限らず、データの深みを捉えきれないという限界も指摘できよう。

他方、陳向明（2020）は、在米中国人留学生を対象とした研究で、彼らが異文化環境でも面子の維持を重視し、直接的な対立を避ける行動傾向が見られると述べている（陳, 2020, pp.149-161）。たとえば、アメリカ人の「公私分別」に対し、中国人留学生は相手が人間関係を軽視し、面子を理解していないと感ずることが多い

（陳, 2020, pp.152-155）。しかし、在日中国人留学生に関する関連研究は、管見の限り見当たらないようである。

また、欧米の個人主義文化と比べて、中国や日本といった東アジア諸国には集団主義や対人調和などの文化的共通性が見られる。Markus と Kitayama（1991）は「自己」のあり方について、欧米の「独立的自己観」と、中日を中心とする東アジアの「相互依存的自己観」を対比し、東アジア社会では集団主義や関係調和が重視されていると論じた（Markus & Kitayama, 1991, pp.225-229）。

したがって、日本という中国と共通点や相違点を持つ異文化環境において、在日中国人留学生の面子意識やそれに基づく行動がどのように変容し、どのような独自性を示すのかについては、さらなる観察と検討が求められると言える。

3. 本研究の課題：文化変容プロセスにおける在日中国人留学生の「面子」再構築

3.1 目的：「面子」再構築プロセスの分析

Lysgaard（1955）は「Uカーブ」理論を提唱し、異文化適応を初期・孤独期・回復期の3段階で捉え、最初は順調でも危機を経て適応が進むとした（Lysgaard, 1955, pp.49-51）。Gullahorn ら（1963）はこれを発展させ、「Wカーブ」理論として帰国時の再適応も同様に段階的に進むことを指摘した（Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E., 1963, pp.39-41）。これらのモデルから、留学生の文化変容プロセスは出来事によって揺れ動き、段階的かつ動的に発展していくと考えられる。また、このプロセスには即時性はなく、一定の遅延を伴う（Social Science Research Council, 1954, p.974）。したがって、出身文化の重要要素である「面子」も、異文化環境で段階的に変容

していく可能性が高いと言える。

前述した異文化文脈での面子研究については、例えば末田（1993, 1998）が中日間の面子意識の違いを静的に比較しているが、文化変容という動的プロセスや具体的な出来事に現れる面子を扱った研究は少ない。また、陳向明（2020）は在米中国人留学生の顔面観を論じているが、在日中国人留学生に関する同様の研究は見当たらないようである。

そもそも、なぜ本研究では中国人留学生を対象に文化変容における面子の問題を研究するのか。面子が中华文化の核心的要素として中国人の心理や行動様式に強く影響しているためである。中国人は生まれながらに面子文化の中で育つため、自身の心理的・行動的特徴を自覚しにくい。また、儒教文化が生み出す理想的人格像と、「情を理よりも重んじる」という現実文化の傾向が、面子に独特な価値観をもたらしめている（翟, 1995, pp.221-223）。

したがって、本研究は文化変容研究の枠組み（Berry, 1992, p.81）に立脚し、「面子」を中心概念として据えながら、在日中国人留学生の文化変容プロセスにおける段階的な変容に着目する。そして、その段階的な変容プロセスの中で起こる具体的な出来事を手がかりに、「面子」がどのように再構築されていくのかを分析することを目的とする。

3.2 分析視角：「顔面」構造とその変遷に基づく検討

本研究は、胡（1944）らの面子理論を基礎とし、それを発展させた翟（1995, 2010）の「顔面」理論を活用する。先行研究の検討から明らかになったように、「顔」と「面子」は異なる概念である一方で、両者は連続性をもつ基準の両側面として捉えられている。したがって、在日中国人留学生における「面子」再構築を分析するには、「顔」と「面子」の両方、すなわち「顔面」構造という視点からの分析が不可欠である。

「顔面」は自己と他者の相互作用の中でどのように機能するのかについて、佐斌（1997）は「顔面」の認知モデルを提示している。このモデルでは、「顔面」に関わる出来事や状況（刺激システム）、それをどう認識し判断するか（認知システム）、そして認知・感情・行動としての反応（反応システム）という3段階がある

¹ ここで言う「面子」再構築には、「顔面」の両側面が含まれている。中国語の日常会話では「面子」という言葉が最も一般的に使われており、「顔」を使った表現、フレーズ、ことわざなども多く存在するが、普段は両者の違いを意識することは難しい。その具体的な構成メカ

ニズムはしばしば見過ごされがちである。しかし、面子理論の研究者は、「顔」と「面子」の使われ方を詳しく分析する中で、両者が実は異なる意味合いを持っていることを明らかにしてきた。したがって、本稿ではあえて「面子」再構築という表現を用いる。

(佐, 1997, pp.104-115)。図3に示している。特に、認知システムは当事者の主観的な状況解釈や基準設定が重要な役割を果たし、反応に大きく影響する。一方、刺激システムは当事者の置かれた社会的環境として背景的に機能し、本人のコントロールが難しい客観的要因と筆者が考えている。筆者は佐(1997)が提唱した「顔面」認知モデルも参照しながら、分析を進めていく。

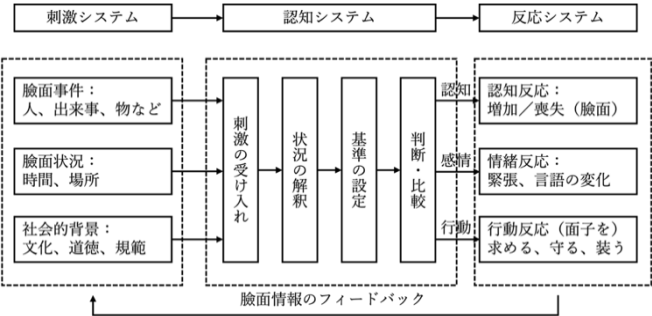


図3 「顔面」の認知モデル
出典：佐斌, 1997, 『中国人的臉与面子：本土社会心理学探索』, 華中師範大学出版社, p.105.より引用（筆者訳）

3.3 方法：在日中国人留学生を対象とするインタビュー調査

本研究では半構造化インタビュー調査法を用いている。本研究は、教育学部門等研究倫理委員会において倫理審査承認を受けている（承認番号：24-006）。研究対象者は、1年以上の留学経験がある在日中国人留学生としている。筆者は中国のSNS「小紅書」で募集投稿を出し、合計16名の対象者を募集することができた。インタビュー対象者の概要は表1で示されている。調査期間は2024年11月～2025年4月である。対象者はS1,2,3,...で表記されている。留学年数は2025年4月までの状況である。

インタビュー調査における質問項目の設定にあたっては、「来日前」「来日初期」「来日中期～後期」という三つの時期に分けて構成した。それぞれの時期における文化変容プロセスにおいて、「面子」に対する認識と経験を中心に探ることを目的とし、「文化変容」と「面子」を切り離して問うことは行わなかった。インタビュー調査では、中国語で質問を行い、回答も中国語で得るという形式を採用している。得られた文字起こしデータは日本語に翻訳した上で、本稿において使用している。インタビュー調査で収集したテキストデータについては、筆者が逐語的にコーディングをし、内容分析を行った。

インタビュー調査は、調査対象者のプライバシーを

十分に保護し、調査の趣旨を適切に説明したうえで実施している。これらの調査について人権および利益を保護するために、収集された資料やデータは研究分析用のみ使用し、不適切な公表を行わないことを徹底している。また、執筆活動が終了した際には、すべてのデータは個人用PCとUSBメモリから削除され、情報が漏洩しないようにしている。

対象者	学年	留学年数
S1	学部3年	2年半
S2	学部4年	7年（語学学校→大学4年修了、2025年3月卒業）
S3	修士1年	1年半（語学学校→2025年4月より修士1年）
S4	修士1年	2年半（2023年に交換留学で1年間来日→2024年6月に大学卒業→語学学校→2025年4月より修士1年）
S5	修士1年	1年半（2023年9月に研究生として来日→2025年4月現在修士1年）
S6	修士2年	1年半
S7	修士1年	6年（語学学校→大学4年修了→2025年4月現在修士1年）
S8	博士2年	1年半
S9	博士1年	7年（語学学校→大学4年修了→修士2年修了→2025年4月現在博士1年）
S10	修士1年	2年（語学学校→2025年4月より修士1年）
S11	修士1年	1年半（研究生1年間→2025年4月現在修士1年）
S12	博士4年	13年（2012年来日→2025年3月博士修了）
S13	博士1年	2年半（語学学校→修士2年修了→2025年4月より博士1年）
S14	修士1年	2年半（2022年9月に2+2プログラムで来日→半年の別科→大学3年に編入→2025年3月卒業→2025年4月より修士1年）
S15	学部4年	7年（2018年高校1年→2025年3月卒業）
S16	修士2年	7年（語学学校→大学4年修了→2025年4月現在修士2年）

表1 インタビュー調査対象者の概要

4. 在日中国人留学生の面子意識における3つの時期の変遷：「他者評価」中心から「自己受容」中心への段階的変容

4.1 来日前の在日中国人留学生における面子意識の形成：他者評価や他人視線に基づいた態度や行動

この節では、中国人留学生が日本へ来る以前、中国でどのように面子意識が形成されていたかをインタビューデータを交えて分析する。

中国社会において成績や能力といった個人の成果は面子の重要な基準となっていた。S2は高校時代の体験として、「テストの成績が出たあとに、全員の順位表が貼り出されていた。そのとき、みんなが順位を見に集まる場面があった…もし順位が大きく下がって、それを友達に見られたら、すごく面子が立たないと感じていた」と語った。またS15は「最初は成績が良かったのに、だんだん落ちていくと、自然と周りの人たちとの距離ができる」と述べており、成績の変化によって疎外感を感じていた。さらに、「成績が悪いと将来まともな生活が

できない」という社会的価値観が強く、自己評価と他者評価が絡み合い、無意識のうちに周りの人を基準にして比較し、常に他人に見えない不安やプレッシャーを生み出していた。

他者評価が直接的に自尊心を傷つける場面もあった。例えば S8 はゼミで、自分では一生懸命準備したにもかかわらず、「大ボスに…データが『犬のフンみたいだ』とまでは言わなかったけど、とにかくひどく否定された…そのときは階段を下りながら泣きそうになっていた」と述べ、努力に見合った評価が得られず、面子が潰された経験が語られた。S3 もまた、一生懸命勉強した試験準備にもかかわらず、友人から「お前は N2 なんて受からない」と能力を疑われたことを語り、他者からの評価が精神的に強く影響したことを示している。

一方で、自己期待を達成した時には自己肯定感が高まり、面子があることをより実感できた。S14 は学生組織の活動を通じ、「やってみたら意外とできるんだなって思ったし、『自分もこういうの、ちゃんとやれるんだな』って思えたのが一番大きかった…一番は、自分で自分を認められたことだと思う」と語った。また、留学や奨学金獲得といった出来事によって、「自分、いい生活してるなって思えて、他人に話すときも自信を持てる」(S14) と感じていた。

集団や人間関係の中では、他者評価に基づいて態度や行動を調整する傾向があった。例えば S12 は、「友達に好かれたい、嫌われたくないという気持ちが強くて、自分からすごく気を遣っていた」と述べ、人間関係の調和が自己評価や面子の維持に影響していたことを示した。S5 も、年末の親戚の集まりで成績が比較され、「自分の面子はものすごく傷つくと感じていた…同年代の親戚の目が一番気になった」と語り、家族間での強制的な比較が面子に与える影響を明らかにしている。

外見や印象管理も面子意識と密接に関連していた。S10 は職場で「みんながどこのブランドのバッグを持っているか…外見からくる『付加価値』で、自分の価値がある程度決まるように感じていた」と語り、ブランド品を通じて自己の価値を高めようとしていた。S3 もまた「友達が新しいバスシュ（バスケットボールシューズ）を買ったら、自分も新しいのを買いたくなった」と述べ、外見による同調圧力を強調している。

さらに、家庭や地域文化の影響も強かった。S1 は「自分は山東出身で、食事のときは基本的に『全おごり』が普通だった…お金がなくても払っていた」と語り、地域的な文化的背景が行動に影響していた。S13 もまた、「小さい頃から受けていた教育は、『見栄を張る』

とまではいかないけど、少なくとも人前ではちゃんとして見せる必要があった」と述べ、家庭環境による影響を示している。

以上のように、来日前の在日中国人留学生の面子意識は、個人の能力や成果に対する評価だけでなく、人間関係、外見管理、文化的背景といった多様な要素が絡み合い、来日前に形成されていたことが明らかになった。

4.2 来日初期の在日中国人留学生における面子意識の実態：文化変容ストレスおよび行動の変化を手がかりに

この節では、来日初期の在日中国人留学生が感じた「恥ずかしさへの敏感さ」を中心に、文化変容ストレスとそれに伴う行動の変化を、インタビュー対象者の語りをもとに分析する。

まず、対象者が最も多く挙げた感情は「恥ずかしさ」であった。S14 はコンビニで小銭をばらまいた際に「周りの目もあるし、全然スマートじゃなかったし…すごく申し訳なかった」と語り、周囲への迷惑や自分の行動が他人視線にさらされることへの不安が背景にあることがわかる。

このような「恥ずかしさへの敏感さ」は、まず「日本での生活への不慣れ」から生じていた。例えば S14 は、バスの乗り方がわからず運転手に注意され、「そのときはすごく気まずかった」と語った。加えて、「日本語能力の不足」も面子意識に影響を与えていた。S2 は授業で「ロコミ」を「ロコミ」と間違えて発音し、「すごく恥ずかしくて、『もうこの授業に出たくない』と思った」と述べた。さらに S10 はコンビニの中国人店員から「留学で来たのに、なんで日本語ができないの？」と疑われ、「面子が潰れた」と強く感じていた。

これらの文化変容ストレスに直面した留学生たちは、主に「文化的模倣」という行動を取っている。S12 は「日本人の行動を観察して真似していた」、S3 もまた「郷に入っては郷に従え」と述べ、新しい環境への適応を試みていた。この文化的模倣の行動は文化変容を促進する一方で、完全に同調しきれない場合には一定の心理的負担も伴っていた。例えば S11 は、「必要があるときはできるだけ日本のルールに従って行動する…必要のない場面では、できるだけ関わらないようにしている。」と語り、選択的な模倣行動を取っていることが明らかになった。

以上の分析から、来日初期の在日中国人留学生における面子意識は、異文化環境での恥ずかしさへの敏感さを軸に、日本での生活への不慣れや日本語能力の不足と

いった要因が複雑に絡み合いながら形成されていることが示された。そして、こうした文化変容ストレスに対処する手段として、多くの留学生が「文化的模倣」を中心とした柔軟な行動変化を選択していたことが明らかになった。

4.3 来日中期～現在における在日中国人留学生の面子意識の多層的变化：自己受容をめぐる面子意識の希薄化を中心に、権力関係を軸とした面子重視との併存

多くの対象者は留学生生活を「V字型」のプロセスとして捉えている。初期の新鮮さから低迷期を経て、次第に安定してきたと語った。この「V字型」の文化変容プロセスは、単なる個々人の経験に還元できるものではなく、在日中国人留学生が異文化環境で変容していく上で、一定の構造的必然性を伴うプロセスであると考えられる。

安定期に入ると、自己受容の面子意識が希薄化し、「外国人である自分」という立場を肯定的に捉えるようになる。「今はもう図太くなったから、間違えたら間違えたで仕方ない」(S11)。「うーん、正直、日本人社会にもうあまり溶け込もうとは思わなくなった…それで十分だと感じるようになった」(S12)。さらに、必要な場合だけ日本のルールに従う選択的な適応も見られる。

「日本の基本的なルールを守るという前提で、中国人としての自分らしさを保つ」(S5)。

恥ずかしさへの敏感さも低下し、失敗を受け入れる態度が形成された。S5がゼミで知らないことを自然に質問するようになったように、次第に失敗への恐れを過剰に気にしなくなり、ありのままの自己を受け入れ始めた。「恥ずかしい経験が多すぎると…羞恥心に対する反応がだんだん鈍くなる感じだ」(S10)という語りも、彼らが失敗を自己受容の契機として捉え直したことを表している。

同時に、自分らしい行動や柔軟な自己調整も見られるようになった。S8は「言葉がわからなくても、決まった場面では定型のフレーズをだんだん覚えるようになった」と語り、英語や実用的な日本語を活用し始め、S4も「完全に合わせるのは無理だと思っている。自分の一部は残しておきたい」として、自分なりのやり方で適応していけばいいと思っている。SNSの投稿も減り、「でも今は、自分がうまくやっているってことを、自分がわかっている方がいいと思うようになった」

(S13)といったように、承認欲求からも徐々に解放されている。

面子に関わる思い方自体も「他者期待」といった「利他的」な傾向から「自己成長」といった「利己的」な傾向へ移行した。S12は「面子を捨ててでも成長したいという気持ちの方が強い」と語り、S1も「余計なトラブルを生まないために…少し頭を下げたり…その方がいいと思う」と、実用的な選択を取るようになっていく。

こうした自己受容は他者からの支援や寛容さにも支えられていた。例えば指導教員からの助言、「わからないことがあったら聞いていいんだよ。それは恥ずかしいことじゃない」(S11)や、日本人の友人からの具体的な支援(S14)といった経験が自己受容を深めた。

このように、在日中国人留学生の面子意識は来日中期から現在にかけて多層的に変化していることが明らかになり、自己受容をめぐる面子意識が希薄化している姿が浮かび上がった。

自己受容の過程で面子意識が薄れていくという側面がある一方、権力関係を軸とした場面では、依然として面子重視もみられる。「上位者との権力関係」では、指導教員との関係において面子が強く意識されている。例えばS9は、教授との関係で「教授の権威に従う姿勢を取る」と述べ、場の雰囲気を保つため表面的に従順な態度を取ることを強調した。

次に、公的場面での面子重視では、役所や大学での手続きなどの場で、ミスやマナー違反がないよう慎重になる姿勢が明らかになった。S14は、『これちゃんとルールに合ってるかな』とか、『提出する書類にミスがないかな』とか、そういうのはけっこう気にする」と語った。

最後に、中国人としての集団面子では、個人の行動が中国人全体のイメージに影響すると考える対象者もいた。S4は、「日本人は一人の中国人を見て、その印象を中国人全体に重ねてしまうことがある」と述べた。

以上のことから、権力関係を軸とした面子重視は、上位者や公的場面、さらには自分が所属する国籍の集団といった多様な場面において明確に現れていることが分かった。

5. 「他者評価」中心から「自己受容」中心への「面子」再構築の社会的考察：「顔面」構造の視点から

5.1 来日前：常に一致を求める同調型「顔面」構造

まず、個人能力や成果の側面について、インタビュー対象者の語りを踏まえると、主な外部からの社会的刺

激には、成績や専門家による評価といった外的な評価基準、個人の努力が他者から否定・肯定される経験、そして個人能力が他者によって疑われたり認められたりすることなどが挙げられる。

当事者による外部の社会的刺激の認知プロセス、すなわち「状況の解釈」と「基準の設定」の段階においては、例えば成績順位という外的な評価基準を前に自分の成績が良くない場合、S15が語るように「最初は成績が良かったのに、だんだん落ちていくと、自然と周りの人たちとの距離ができる」という劣等感や、S2の「それを友達に見られたら、すごく面子が立たないと感じていた」という不安感が生じる。つまり、他の同じく外的な評価基準で評価される他者が実際に比較してこなくても、当事者自身がそうした外部刺激を独自に解釈し、他者が自分と比較しているのではないかと仮定することで、劣等感や不安感といった情緒反応が生まれているのである。さらに、実際に他者から否定や肯定があった場合には、こうした情緒反応はより強く現れる。例えば、S8は自分の努力の成果が指導教員から厳しく批判された経験に対し、「自分は間違っていないのに怒られた」という自分の努力と外部評価の不一致を感じ、「辛かった」「泣きそう」といった落胆の情緒反応を示している。これらはいずれも、個人イメージとしての「顔」と外部評価としての「面子」との間に、隠れた、あるいは顕在的なズレや不一致が生じたことによるものであり、逆に、個人能力や成果が他者から肯定された場合には、こうしたネガティブな情緒反応ではなく、ポジティブな感情が生まれる。すなわち、この時期の当事者たちは「顔」と「面子」の一致性を強く意識し、その一致の実現を求めていることが明らかになる。

同様に、このような「顔」と「面子」の一致をめぐる問題は、同級生集団や親戚間での比較にも見て取れる。例えばS5は、高校卒業時に他の同級生がSNSで自分の進路を共有する中で、自分だけ参加できなかったことで劣等感を抱いたと語った。ここでは、他者からの外部刺激によって実際には存在しない「疎外感」が生まれており、それは自分の「顔」が正の評価としての「面子」を得られないのではないかという内面的な不安、つまり「顔」と「面子」の不一致への懸念であると言える。また、親戚など近い人間関係の場で、S7が「おとなしくないって悪い印象を持たれるのが嫌だった」として親戚の前でずっと「おとなしい子」を演じていたエピソードにも、「顔」と「面子」の不一致を恐れる意識が表れている。

さらに、外見や印象管理の面でも同様の傾向が見ら

れる。S13は職場で周りの注目を集めるためにブランド品で自分を飾ったり、他人からの面倒事を避けるために見栄を張ったと語った。また、S1やS3は友人の目を気にして見栄え的な外見消費活動をしたり、S6は友人の美的感覚に合わせて服装を選んだと述べている。これらは、積極的に自分の「顔」を調整することで正の評価としての「面子」を得ようとする行動であり、外部評価に合わせて自分の「顔」を作り上げることで、外部期待に応える「面子」を意識している、すなわち「顔」と「面子」の一致を強く志向していると言える。

また、家庭や出身地といった文化的影響についても同様である。例えば、S1は出身地の文化的影響により全奢りが当たり前だと感じていたり、S13は家庭文化の影響で「少なくとも人前ではちゃんとして見せる」ことが大切だと考えている。こうした社会的背景という外部の社会的刺激を当事者は受け入れ、自らの行動基準として内面化しており、ここにも外部からの正の評価に合わせて自分を演出する「顔」の作り上げが見て取れる。

総じて、これらの対象者たちの経験からは、「顔」と「面子」という二重のプロセスが来日前の自己意識や行動の根底にあり、両者は決して独立したものではなく、社会的状況の中で相互に作用し合う構造を形成していることが示唆される。すなわち、「顔」は社会的期待に応じて作り上げられる外的イメージであり、「面子」はそのイメージが他者評価とどのように結びつくかによって、心理的な葛藤を生じさせるものである。とりわけ、「顔」と「面子」がともに一致してはじめて「顔面一体」となり、当事者本人が「面子がある」と実感できるのである。

このように、「常に一致が求められる顔面構造」に対して、対象者たちの来日前に関する語りを踏まえると、筆者はこの時期の「顔面」構造を「同調型」と呼べる特徴があると考えている。すなわち、同調的な基準に適合しようとする志向が強く、「顔」の作り上げと「面子」の獲得が、周囲との比較や一致性への欲求によって大きく影響されている。このような「同調」特徴については、佐（1997）の議論を引用して説明することができよう。佐（1997）は、「顔面」認知モデルのうち、認知システムにおける「状況の解釈」について分析する中で、人はそれぞれ異なるため、同じ状況に対する解釈もさまざまであるが、同じ文化的背景にある人々の場合、社会的状況の解釈においては、むしろ共通点の方が相違点よりも多いだろうと指摘している（佐, 1997, p.107）。また、「基準の設定」についても、佐（1997）は個人によって「顔」と「面子」の基準は異なるが、中国文化の制

約の下では、その違いも大差ないとしている（佐, 1997, p.108）。このように考えると、自己と他者が同一の文化規範に基づいて行動している場合、個人の主体性に由来する差異よりも、文化規範が個人に付与する共通点の方が顕著であると言えよう。

これらの「同調型の顔面反応」は、当事者が顔面事件や顔面状況、さらには社会的背景といった外部からの社会的刺激に対して、これに合わせる形で認知の選択を行い、その認知選択に合わせた反応を示すことで、円滑に顔面情報のフィードバックが進行していることを一定程度示している。以上のように、在日中国人留学生の来日前の「顔面」構造は、常に（「臉」と「面子」との）一致が求められる同調型「顔面」構造であると言えよう。以下の図4に示されている。

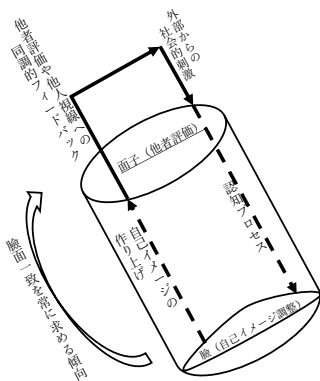


図4 同調型「顔面」構造（筆者作成）

5.2 来日初期：一致を求めざるをえない異文化文脈下の自己保全型「顔面」構造

来日初期の時期においても、在日中国人留学生の面子意識の中には依然として「他者評価」や「他人視線」が強く作用しており、来日前に形成されていた「他者評価」と「自己期待」との一致によって「面子がある」と実感するという、常に一致が求められる「顔面」構造が引き続き機能していることがうかがえる。

しかし、この時期に見られる「顔面」構造は、来日前のような「同調型」の「顔面」構造とは異なり、当事者が置かれている異文化環境は彼らにとって未知であり、周囲の人々が持つ文化規範と、自己がこれまでの文化環境で身につけてきた文化規範とは全く異なるものである。

インタビュー対象者たちの語りから明らかになった顕著な特徴の一つは、来日初期における「恥ずかしさへの敏感さ」である。つまり、来日初期の中国人留学生は、他人が集まる場での些細な失敗によって自分が周りとは違う存在として目立ってしまうことに対して、恥ずか

しさや気まずさを感じていたことである。

この「恥ずかしさ」は単なる個人的な感情にとどまらず、自分の行動が他者に迷惑をかけたのではないかという配慮や、自分の言動が中国人全体のイメージに悪影響を与えるのではないかというプレッシャーも含まれており、さらには他人からどう見られているか、評価されているかへの強い意識から生じていた。とくに、他人が集まる場で自分だけが周囲と違う存在として目立ってしまうことや、他者からの善意の配慮さえも自分を特別視することとして負担に感じる傾向があった。

それは単なる「日本での生活への不慣れ」に起因するだけでなく、「日本語能力の不足」による影響も大きい。このような状況においては、異文化環境の中で自己イメージとして意図的に構築された「臉」と、そのイメージに対する異文化の他者からの評価、すなわち「面子」との間に、しばしば不一致という葛藤が生じていた。例えば、S2が語ったように、もし中国で言語ミスをしてそこまで反応しないが、日本ではちょっとした間違いでも恥ずかしい気持ちが強くなるといった発言からも、日本社会という新しい環境では、些細な失敗であっても大きな恥ずかしさにつながるものがうかがえる。それは、あたかも中国が「家のような空間」であるのに対し、日本は「外の世界」であるかのような感覚の違いを反映している。すなわち、この時期においては、新たな文化環境に移行したことにより、外部からの社会的刺激、すなわち「顔面事件」、「顔面状況」、「社会的背景」

（図3参照）にも大きな変化が生じている。そのため、こうした社会的刺激は一層顕著に作用することになる。在日中国人留学生は、これらの社会的刺激を受け入れ、それぞれが独自に状況の解釈を行うが、日本での生活への不慣れや、日本語能力の不足から、初期段階特有の基準を設定し、他者（あるいは来日前の自分自身）との判断・比較を行う。その結果として、恥ずかしさへの敏感さなどの情緒反応が生じやすくなるのである。

こうした文化変容ストレスによる恥ずかしさへの敏感さに対応し、また現地社会によりよく適応するために、対象者たちは行動の変化をし、いわゆる「文化的模倣」を行っていた。例えば、S16が「日本に馴染みたかったし、排除されたくなかったから、もっと話したいと思っていた。だから最初は模倣だった」と語っているように、一部の在日中国人留学生は日本社会に受け入れられたい、排除されたくないという強い意欲から、積極的に周囲の日本人の行動を模倣していた。また、S5の「自分の行動が日本人の文化的な期待に反していないか、すごく気にしていた」という語りからも、個人の行

動が現地社会の文化的期待に適合しているかどうかを常に意識していたことがうかがえる。一方で、すべての場面で無条件に模倣するわけではない。例えば、S11は飲み会のような必要のない場面については、「できるだけ（飲み会のような場面を）関わらないようにしている」と述べており、S10も「生活も勉強も日本でしている以上、完全に（自分が関わりたいくない場面を）避けることはできない」と語っている。つまり、異文化環境の中で在日中国人留学生は、場面ごとに模倣するかどうかを選択し、時に妥協したりしていたと言えよう。

これは、異文化環境の他者の期待に適合するように自らの「顔」を整え、よりバランスが取れた「面子」を獲得し維持するための「仕方ない行動」とであると言えよう。つまり、一方では日本人の行動規範に合わせて「文化的模倣」を行い、日本人との平均的な行動をする傾向が見られるが、他方で、こうした「文化的模倣」はあくまで日本で長期的に生活して勉強するという目的が存在している。

したがって、この時期の在日中国人留学生にとって、個人としての「顔」と外部からの評価である「面子」は、「一致を求めざるを得ない」状況に置かれていると言える。この「一致を求めざるを得ない」傾向は、主体的な同調というよりも、むしろ異文化環境からの圧力による「主体的な納得のなさ」が大きな動因となっている。言い換えれば、こうした文化変容ストレスの高い環境の中において、当事者は自分を「保全」することを最優先に考えるようになり、この「自己保全的な行動」は、恥ずかしさや排除のリスクから自分を守り、できる限り周囲に目立たずに適応しようとする行動であり、選択肢の少ない中で取り得る比較的合理的な戦略であると考えられる。また、「顔」と「面子」のズレを意識的に最小化しようとする意欲も、この時期に捉えられるであろう。

以上のように、この時期には、「顔」と「面子」の一致を積極的に求める主体的な姿勢は弱まり、むしろ異文化環境における他者の期待に合わせるため、やむをえず自己保全的な目的で両者の一致を求めざるを得ない状況に置かれていると言えよう。筆者は、この時期の「顔面」構造を、一致を求めざるをえない異文化文脈下の自己保全型「顔面」構造と位置づける。以下の図5に示している。来日前の「顔面」構造の図4と異なり、「異文化環境の他者への自己保全的フィードバック」と「異文化環境からの顕著な社会的刺激」の間の顔面情報フィードバックについては、筆者は点線かつ細い線で表現した。これは、この時期の顔面構造が「一致せざるを得な

い」状況に置かれている一方で、その背後には違和感や主体的な納得の欠如が潜んでいることを強調する意図がある。

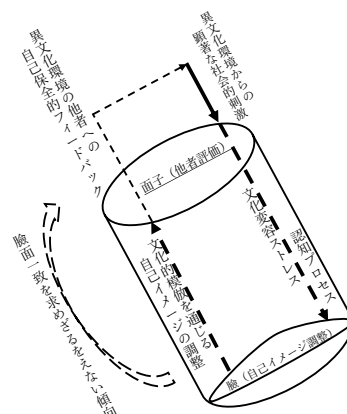


図5 自己保全型「顔面」構造（筆者作成）

5.3 来日中期～現在：一致を求められず主体性を呈示する自立型「顔面」構造

来日中期から現在にかけての時期における在日中国人留学生の「顔面」構造を筆者は、一致を求められず主体性を呈示する自立型の「顔面」構造として位置づけることができる。

インタビュー対象者の経験に基づいて具体的に述べると、例えば「外国人である自分」という自己位置づけに関して、対象者たちは「外に合わせる」姿勢から「内面を大切にする」姿勢へ転換しており、自分自身の気持ちをより大切にする傾向が見られた。つまり、来日初期のように、日本社会において「文化的模倣」のようなストラテジーを取り、他者評価における「面子」と自己イメージとしての「顔」との一致を追求する状況から、この時期になると、自分が外国人であることを積極的に認め、「面子」、すなわち他者の評価や心理的地位へのこだわりを弱める方向へ変化していることがうかがえる。また、この時期には恥ずかしさへの敏感さが低下し、ありのままの自分を徐々に受け入れるようになっている。例えば大学院入試の不合格といった失敗を経験した場合にも、それをむしろ自分自身を見直すきっかけと捉え、柔軟に自己調整を図ったり、「等身大の自分」を受け入れたり、自分なりのやり方に対応したりする姿勢が目立つようになった。さらに、何らかの問題が発生した際にも、まず自省ではなく、問題の原因を相手に帰属させるという「責任の外在化」も見られている。

こうした他者評価としての「面子」へのこだわりの低下は、自己イメージとしての「顔」の作り上げにも影響を与えている。つまり、この時期における自己イメージとしての「顔」は、他人視線や他者評価を強く意識し

たり、他者の期待に合わせたりすることが少なくなり、むしろ自分自身の感情をより重視するように変化している。また、対象者たちは「面子」に関わる思い方自体も変化し、「他者期待」を重視する「利他的」な方向から、「自らの成長」を重視する「利己的」な方向へ転換し、面子と損得の関係をより冷静に捉えるようになり、時に「面子」を「形式的なもの」として扱うこともあった。このような変化は、自分自身の実際の状況に基づいた「臉」の作り上げを促すとともに、他者の期待に合わせる「面子」を軽く見る態度を示している。

以上のような変化に共通しているのは、他者評価としての「面子」が肯定的であれ否定的であれ、自己イメージとしての「臉」への影響が大きく低下しているという点である。また、自己イメージとしての「臉」の作り上げや調整も、他者評価の「面子」に特別に合わせるのではなく、「面子」の解釈権を自分自身に取り戻している状況がうかがえる。

「臉面」の認知モデルと照らし合わせて考えると、こうした変化は主に認知システムと反応システムにおいて顕著に現れている。具体的には、認知システムの「状況の解釈」や「基準の設定」において、当事者が「他者評価」中心から次第に「自己受容」中心に転換していく点が挙げられる。反応システムでは、こうした認知システムの変化が面子の得失に対する知覚反応に影響を与え、他者評価としての「面子」を気にする程度が低下する。また、情緒反応としては恥ずかしさへの敏感さが減少し、行動反応としても「自己の受容」や「柔軟な自己調整」といった側面がより重視されるようになっていく。

一方で、この時期の語りの中には、権力関係における面子を重視する傾向も見られた。例えば、指導教員など目上の上位者との関係において、対象者たちは常にその権威に従ったり、公的な場においても慎重的な行動を取る傾向があった。また、中国人全体のイメージという集団面子を意識する様子も見られた。こうした、自己と目上の立場にある他者、自己と公的な場、自己と所属する国籍の集団との関係において面子を重視する傾向を説明するとすれば、それは第一に、こうした権力関係において他者や集団との調和を維持しながら自己イメージとしての「臉」を慎重に保つことで、結果的に自己利益が損なわれるのを防ぐためだと考えられる。すなわち、自己利益を守るには、一定のバランスの取れた調和関係を保つことが必要である。

第二に、こうした行動は「重要他者」(significant others) の評価を重視する意識とも関連している。陳

(1988) は面子の定義において「重要他者」という概念を強調し、それが個人である場合もあれば参照集団である場合もあると指摘している(陳, 1988, p.111)。そして、「重要他者」は当事者の自尊感情に対して心理的な賞罰を与える役割を果たし、その相対的重要性によって面子の得失感情の程度が拡大したり縮小したりすると述べている(陳, 1988, p.111)。この3種類の権力関係における「重要他者」からの評価、すなわち「面子」は、当事者にとって相対的に重要であるため、当事者は自己イメージとしての「臉」を積極的に調整し、「重要他者」からの評価に積極的に適合させることになるのである。

以上のように、来日中期から現在にかけての在日中国人留学生の「臉面」構造は、来日前や来日初期とは異なり、より柔軟な自己イメージの形成に移行していると言えよう。他者評価としての「面子」へのこだわりは徐々に薄れ、自己の感情や実際の状況を重視する「臉」の構築が目立つようになる一方で、権力関係の中の「重要他者」においては、依然として「面子」を重視する慎重な姿勢が残っている。すなわち、異文化環境の中で自己受容を深めながら、相手や状況に応じて「面子」の意味づけや自身の行動選択を柔軟に調整する「自立型」の「臉面」構造が形成されつつあることが明らかになった。以下の図6に示されている。筆者は、この時期の「臉面」構造の図においても、最上部に「臉面情報フィードバック」の点線を残している。これは、「重要他者」との間で臉面情報のフィードバックが依然として機能していることと、他者評価が個人の「臉」へ何らかの影響を及ぼし続けている可能性を示唆している。一方で、この段階では「臉」と「面子」との一致を積極的に求めず、むしろ自己受容を重視することで面子意識が希薄化する傾向が見られるため、図の下部には太線で「自己受容」と「臉」との小さなループを新たに加えている。すなわち他者評価よりも自己受容を優先するプロセスが強調されていることを示す。

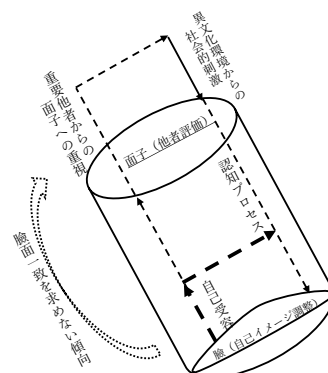


図6 自立型「臉面」構造 (筆者作成)

以上のように、在日中国人留学生の「顔面」構造は、来日前、来日初期、来日中期～現在という3つの時期において、常に一致を求める同調型「顔面」構造から、一致を求めざるをえない異文化文脈下の自己保全型「顔面」構造、そして一致を求められず主体性を示す自立型「顔面」構造へ段階的に変容していることが明らかになった。また、来日前や来日初期においては、在日中国人留学生の面子意識には依然として他人視線や他者評価が大きく影響しており、面子に対する解釈権は主に他者側にあった。しかし、来日中期以降は、重要他者を除いた一般的な他者からの社会的刺激の影響が低下し、他者評価としての面子がネガティブであれポジティブであれ、自己受容という文脈の中でそれほど重要なものではなくなる傾向が見られるようになった。これに伴い、面子に対する解釈権も、他者から自分自身に回帰していく傾向が見られる。

6 「他者評価」中心から「自己受容」中心への「面子」再構築の社会的考察：社会的比較に基づく「相対的剥奪感」の変化

このような自己と他者の相互作用の中で生じる「顔面」構造の変遷の背後には、いかなる深層的な社会心理的メカニズムが存在するのだろうか。第6章では、「相対的剥奪感」という視点から分析を試みる。

6.1 相対的剥奪感とは

「相対的剥奪感」とは、個人または集団が、関連する参照集団との比較を通じて自らが不利な立場にあると認識し、その結果、怒りや不満、本来得られるべきだといった否定的感情を生じる心理的現象である（Heather J. Smith, Thomas F. Pettigrew, 2015, p.2）。Runciman（1966）は、相対的剥奪感をより操作的に定義し、その成立には以下の4つの条件が必要であるとした。すなわち、①個人が何らかのものを持っていない、②他者がそれを持っていることを認識している、③自分もそれを持つことを期待している、④その期待が実現可能だと考えている、という4条件である（Runciman, 1966, p.10）。このような感情は、「社会的比較」の直接的な結果であるとされている（熊、葉, 2016, p.440）。さらに、Runciman（1966）は、相対的剥奪感はいくまでも「感覚」としての剥奪であり、相対的に剥奪されたと感じる人が、必ずしも一般的な意味で客観的に何かを欠いているとは限らないと述べており、また、相対的剥奪感とは、こうした被剥奪感が、他者や集団との「想像上の比較」を含んで

いることを意味するとしている（Runciman, 1966, p.10）。

筆者は、この定義の中で特に重要な部分が2点あると考えている。一つは「比較」、すなわち「社会的比較」である。Festinger（1954）は初めて社会的比較理論を提唱し、「客観的かつ非社会的な基準が不足している場合、個人は他者の意見や能力と自分自身を比較することで、自身の意見や能力を評価しようとする」と定義した（Festinger, 1954, p.118）。また、個人は自分と大きく差異のある他者を比較対象とはせず、適度な距離のある他者を選んで比較を行う傾向があるとも述べている

（Festinger, 1954, p.120）。一方で、Gilbert ら（1995）は Festinger（1954）の見方に批判をし、人々は常に自発的かつ自動的に他者との比較を行う傾向があり、たとえその比較が論理的に意味を持たない場合であっても、比較は無意識のうちに生じると指摘している（Gilbert, D. T., Giesler, R. B., & Morris, K. A., 1995, pp.232-233）。さらに、Gilbert らは、社会的比較はまず自動的に発生し、その後に個人が意識的にその比較の影響を撤回したり修正しようと努力するという「比較—修正」の段階があるとしている（Gilbert 等, 1995, p.234）。

もう一つ重要なのが「参照集団」という概念である。Runciman（1966）は、「参照集団」とは必ずしも具体的な「集団」である必要はなく、特定の個人、あるいは抽象的な観念である場合もあると述べている

（Runciman, 1966, p.11）。また、Runciman（1966）は「比較的参照集団」と「規範的参照集団」という2つのタイプの違いについて説明しており、「比較的参照集団」とは、個人が自身の状況や属性を比較する対象となる集団のことであり、「規範的参照集団」とは、個人が行動や価値判断の基準を得るために参照する集団である（Runciman, 1966, p.11）。そして、「比較的参照集団」が「自分もその人（集団）になりたい」と思う対象である場合、必ず相対的剥奪感が生じるとされている。しかし、その集団が単なる「規範的参照集団」に過ぎない場合は、必ずしも相対的剥奪感が生じるとは限らない。つまり、「規範的参照集団」は、それが個人に不利な比較をもたらす場合にのみ相対的剥奪感を引き起こすのだとされている（Runciman, 1966, p.12）。また、相対的剥奪感のタイプを区別する際に、Runciman（1966）は「利己型」相対的剥奪と「博愛型」相対的剥奪の違いについても言及している。これは、個人レベルで自分自身の利益に関して剥奪を感じる場合と、自分が所属する集団の一員として、集団全体で剥奪感を共有する場合との違いであるとされている（Runciman, 1966, p.34）。その

後の研究では、これらはそれぞれ「個人的相対的剥奪感」と「集団的相対的剥奪感」として一般的に区別されている（熊、葉, 2016, p.440）。

参照集団との社会的比較において、郭（2001）は、異なる集団と比較することで異なる心理的感覚が生じると述べている（郭, 2001, p.72）。すなわち、下位の集団と比較した場合には満足感を得やすいが、上位の集団と比較した場合には、努力への意欲という向上心が生まれることもあれば、失望感や相対的剥奪感が生じることもあるとされている（郭, 2001, p.72）。ここで筆者は、「上位」あるいは「下位」の集団とは、必ずしも地位だけを指すものではなく、能力などにおいて優れている個人または集団も含まれると考える。

留学生、異文化適応と相対的剥奪感に関する研究については、管見の限り見当たらないようである。しかし、中国国内の移住人口の社会的包摂に関する研究から、いくつか参考となる視点を得ることができる。例えば、陳、張（2025）は、社会的比較が中国深圳市における移住高齢者の社会的包摂に及ぼす影響を検討し、社会的比較が移住高齢者の社会的包摂に対して負の影響を持ち、そのメカニズムとして相対的剥奪感が媒介効果を果たしていることを明らかにした（陳、張, 2025, pp.15-26）。また、許（2007）は、農民工などの流入人口が現地住民を参照対象とする際、自身が社会的地位や収入などの面で明らかな差異を認識した場合、強い相対的剥奪感を生じやすく、この心理状態が居住地での社会的包摂プロセスをさらに阻害する要因となると指摘している（許, 2007, p.57）。

似ているように、留学生は移住先社会において少数派であり、相対的に弱い立場に置かれた集団であると言える。そのため、文化変容のプロセスにおいて、相対的剥奪感がある程度、留学生の文化変容実態に影響を及ぼしていると考えられる。これから、相対的剥奪感の視点から、在日中国人留学生の「面子」再構築の経験を基に考察していく。

6.2 来日前に見られる強い相対的剥奪感：「内集団」かつ「比較的」参照対象に基づく社会的比較

5.1 で来日前の在日中国人留学生に見られる同調型「臉面」構造について考察した。この段階においては、他者評価や他人視線への強い意識が特徴的な面子意識として見られている。ここで言う「他者」とは、筆者は「内集団」の参照対象、すなわち当事者と同じ集団に属する他者であると位置づける。

例えば、個人能力や成果に関連する成績に関する語

りとして、S15は「最初は成績が良かったのに、だんだん落ちていくと、自然と周りの人たちとの距離ができる」と語っている。また、S12は「うちのクラスでは、学生を（成績を基準にして）何段階かに分けていて、自分はその中の一番下のグループに入っていた」と語っている。このように、同じ成績評価基準の下で評価される集団内において、他者よりも成績が劣っていると感じた当事者たちは、劣等感を感じたり、S12のようにクラスの一番下のグループに分類されたことで、常に比較と被比較の中に置かれており、自分にとって相対的に不利な状況にあると認知すると見て取れる。そのため、ある種の相対的剥奪感が生じていたと言える。

さらに成績に関連する具体的な例として、S5の「高考」（大学入学試験）の経験が挙げられる。S5は、「実力としては十分だったのに、会考（高校卒業試験）のせいで第一志望を逃した」と述べているように、自分には十分な実力があつたにもかかわらず、その年の大学入試では同点数の場合に「会考」の成績で順位が決まるというルールのために、第一志望を逃し、希望していた東部の都市の大学に進学できなかったのである。第一志望の東部都市の大学への進学を逃したことで、S5は周りの同級生がSNS上で進路をシェアするのに直面しつつ、「自分がまだ西部に残っていることを知っていながらそういうことを書くのがすごく悲しかったし、面子もつぶれたような気がした」と語っている。理想とする大学には進学できなかったが、十分な実力があると自認していたS5は、周囲の比較的満足な進路を見て、自発的に比較し、劣等感による強い相対的剥奪感を抱いたことが分かる。

外見や印象管理の経験からも、内集団の中の他者との比較による強い相対的剥奪感を読み取ることができる。例えば、S10は来日前に中国の職場で働いていた際、「中国にいた頃は、職場環境での他人との比較がすごく気になっていた。具体的に言えば、みんながどこのブランドのバッグを持っているかとか、どこのブランドの服を着ているかみたいところ」と語っている。また、S13も職場でのインターンの頃に、周囲の注目を集めたり、面倒事を避けたりするために、ブランド品を購入したり、同僚に奢ったりするなどの行動を取っていた。このようなブランド品による自己を飾る行為は、相対的剥奪感を和らげ、自分の置かれる立場を不利から有利に転換するための戦略と考えられる。

同様に、S1やS3の語りからもこの傾向がうかがえる。S1は「逆に自分の服装がイマイチだったりすると、面子が立たないと感じることもあった」と述べ、ま

た、S3は友人が新しい服を買っているのを見ると自分も買いたくなり、自分だけ古い服を着ていると、「なんとなく居心地が悪く感じた」と述べている。さらに、S6は友人の美的感覚に合わせて服装を選び、S9は周囲から自分の服をからかわれることを恐れて保守的な服装を選ぶなど、外見を通じて内集団の他者と比較し、自分が不利な状況にあることを自覚した場合には、同調的な対応策を取る傾向が見られる。

このような外見や印象管理に関する経験は、内集団の中の他者との社会的比較によって相対的剥奪感が生じやすく、その感情を緩和するために、内集団の他者と同調した服装や、彼らの美的感覚に合わせるといった対応策を取る傾向がうかがえる。これらは、すでに感じている、あるいは今後感じる可能性のある相対的剥奪感を緩和するための「同調型」戦略として機能していると考えられる。つまり、ここには「比較—相対的剥奪感—同調」という連鎖的なプロセスが存在していると言える。

ここで補足しておきたいのは、先ほど相対的剥奪感の定義を振り返った際に触れたように、Runciman (1966)は「比較的参照集団」と「規範的参照集団」という違いについて説明している点である。Runciman (1966)によれば、「比較的参照集団」とは「自分もその人になりたい」と思う対象であり、このような対象との比較では必ず相対的剥奪感が生じるとされている一方、対象が単なる「規範的参照集団」に過ぎない場合、必ずしも相対的剥奪感が生じるとは限らない

(Runciman, 1966, p.12)。以上にあげた経験においても明らかのように、内集団の他者との比較の際には、しばしば同調的な態度や戦略が取られていることがうかがえる。Runciman (1966)の説明に従えば、こうした参照対象は「比較的参照対象」と呼ぶことができる。したがって、来日前の在日中国人留学生が抱いていた相対的剥奪感については、「内集団」かつ「比較的」参照対象に基づく社会的比較によって生じた強い相対的剥奪感であるとまとめることができる。

6.3 来日初期に見られる異文化文脈下の相対的剥奪感：「比較的」および「規範的」参照対象としての「外集団」との社会的比較を中心に

来日初期において、在日中国人留学生が社会的比較の対象とするのは主に日本社会の他者、すなわち外集団の他者であり、特に日本人が中心である。4.2で分析した「恥ずかしさへの敏感さ」は、こうした「日本での生活の不慣れ」や「日本語能力の不足」から生じている。

この「恥ずかしさ」は一言で言えば「異質感」に起因していると言える。

例えば、S4がラーメン店の券売機の使い方が分からなくて戸惑ったり、S6が試着室で靴を脱ぐルールを知らずに困ったりする場面、S14がバスの料金の支払い方法を知らず「他の人をかなり待たせちゃったと思うし、急いでいる人もいただろうし、なんか申し訳なかった」と語った場面などがあげられる。これらは一見すると文化ルールへの無知によるミスだが、同時に文化ルールを熟知している他者との比較の意識が強く働いている。当事者たちは、自分の不慣れが周囲に迷惑をかけることへの恥ずかしさや、うまく行けている他者と比較することで自分の未熟さや失敗を強く意識する。この葛藤が「相対的剥奪感」として現れていると考えられる。こうした恥ずかしさや気まずさといったネガティブな情緒反応は、むしろ異文化環境にうまく適応しようというポジティブな意図の裏返し、「本来得るべきだ」という期待から生じるものであると言える。そもそも、このような「相対的剥奪感」は、単なるネガティブな情緒反応ではなく、異文化環境に適応したいというポジティブな意図があってこそ生じるものである。もし当事者に適応しようという期待がなければ、そもそも適応の成否自体が問題にならず、比較や比較による相対的剥奪感も生じない。つまり、社会的比較を通じて感じられる恥ずかしさや気まずさといった相対的剥奪感の背後には、よりよく異文化に適応したい、他者のようにうまくやりたいという前向きな動機が存在していると言える。言い換えれば、こうした相対的剥奪感とは、適応へのポジティブな意図があって初めて現れる現象である。

こうした文化変容ストレスに直面した際、在日中国人留学生の多くは「文化的模倣」を戦略として選択する傾向が見られる。例えば、S12は「その頃の自分は、日本人の行動を観察して真似していたと思う。とにかく彼らに溶け込みたかったんだ」と述べ、S16も「日本に馴染みたかったし、排除されなくなかったから、もっと話したいと思っていた。だから最初は模倣だった」と語っている。文化的模倣は、来日初期に生じる一時的な相対的剥奪感を緩和するための効果的な手段となっている。

また、S12は文化的模倣の動機について「当時の自分は日本が大好きだったし、‘日本人になりたい’っていう気持ちがあった。だからそういうやり方が、自分を守る手段にもなっていたと思う」と説明し、S5は「自分の行動が日本人の文化的な期待に反していないか、すごく気にしていた」と語っている。一方で、S11のように

「必要があるときはできるだけ日本のルールに従って行動するし、彼らのやり方もまねる。でも、必要のない場面では、できるだけ関わらないようにしている」と述べる人もおり、文化的模倣への態度には個人差が見られる。

このように、来日初期の在日中国人留学生の参照集団には、「比較的参照対象」と「規範的参照対象」という2つのタイプが並存していることが見て取れる。S12が文化的模倣を選択した背景には「日本人になりたい」という気持ちがあり、S5は日本人の文化的な期待に反したくないという気持ちもあった。これらの事例は、在日中国人留学生の一部が社会的比較による相対的剥奪感を体験し、その結果「自分もその人になりたい」という志向（Runciman, 1966, p.12）を持つようになったことを示している。すなわち、外集団の他者を「比較的参照対象」として捉え、自らもそのような存在になろうとする傾向が見られる。

一方で、他の一部の留学生は、社会的比較の対象を「行動の基準を得るため」（Runciman, 1966, p.12）のみに用い、必要な場面でのみ文化的模倣を行うことで相対的剥奪感を緩和していた。言い換えれば、彼らにとって外集団の他者は「規範的参照対象」として機能しており、同一化を志向するのではなく、自身の行動判断の指標として位置づけられている。

さらに、言語能力に関連したエピソードからもこの傾向が見て取れる。例えばS10は来日直後、ほとんど日本語ができなかったため、コンビニの中国人店員から「留学で来たのに、なんで日本語ができないの？」と2回問い詰められた経験があった。最初は「日本に留学しに来たのに、なんで日本語をちゃんと勉強していないのか」と自分を省みたが、二度目以降はその店を避けるようになった。この事例は、最初は比較的参照対象として「自分もそのようになりたい」と願うが、繰り返される否定的な比較により、やがて単に「行動基準」を提供する参照対象に変化した例と言えよう。同様にS8も、来日前は日本語をほとんど勉強せず、来日後に同じ研究室での中国人留学生の日本語能力が遥かに高い状況で、最初は「せっかく来たんだから日本語くらいは少しは学ばなきゃ」と自分に課していたが、最終的には学業との両立が難しく、その基準を諦めた。このように、比較的参照対象から比較基準のみを提供する規範的参照対象への転換が観察される。

以上のように、来日初期の在日中国人留学生は、日本社会という異文化環境において、「比較的」および「規範的」参照対象として外集団の他者と社会的比較を

行い、異文化での変容初期に一時的であるが強い相対的剥奪感を体験していたことが明らかになった。そして、この相対的剥奪感の現れとしての「恥ずかしさへの敏感さ」に対応するため、彼らは「文化的模倣」というストラテジーを取り、相対的剥奪感がある程度緩和されていたと考えられる。つまり、「比較—相対的剥奪感—文化的模倣」という連鎖的なプロセスが主に観察されたと言えよう。その中、社会的比較の参照対象に対する態度についても、在日中国人留学生自身の主体的な変化傾向が一部に見られた。このような主体的な変化傾向は、来日中期以降、顕著になりつつある。

6.4 来日中期～現在に見られる相対的剥奪感の低下： 社会的比較への主体的修正による自己受容感の向上を中心に

この時期における顕著な特徴の一つは、在日中国人留学生における「外国人である自分」という自己位置づけが定着していく点である。これは、来日初期に見られた現地社会と日本人の文化的期待に合わせるという姿勢から、自分と他者は違うという「差異」そのものを当然視し、その差異にこだわらない、無理に合わせない態度への転換を意味している。

例えば、S11は「今はもう図太くなったから、間違えたら間違えたで仕方ない」と語り、S12も「正直、日本人社会にもうあまり溶け込もうとは思わなくなった。自分ひとりで過ごすとか」と語っている。また、S13は「聞き取れないものは聞き取れない、自分はネイティブじゃないし、相手が言っていることが理解できないこともある、それは当然のことだと思っている」と語った。これらはいずれも、異文化環境での経験を重ねる中で、自己位置づけが「外に合わせる」から「内面を大切にす」方向へ変化していることを示している一方、社会的比較に直面した際に、自分の認知を修正しつつある、「比較—修正—自己受容」という連鎖的なプロセスを経て、柔軟に自己を受け入れていく傾向も反映している。

異文化環境における自己位置づけの変化に加え、「失敗の受容」や「柔軟な自己調整」という側面においても、この「比較—修正—自己受容」の連鎖はより顕著に表れている。例えば、S16はアルバイトを始めた当初、まかないをたくさん食べることで周囲から「そんなに食べるの？」と驚かれたが、そのような他人視線や他者評価に対して、心の中で「‘食べる量が多い’ っていうのは、自分にとって恥ずかしいことじゃないし、むしろ自然なことだと思えるようになった」と徐々に受け止められるようになったと語る。また、S5も分野ゼミに参加

した当初は自分の無知が露呈することを恐れていたが、次第に分らないままでも質問してもよいと思うようになった。S3は旧帝大に落ちた経験を通じて、自分の実力に合わせて行動すればいいという考え方が変化し、「自分の実力に合わせて行動すればいい」と思っている。そこから「面子はそこまで大事ではない」と実感するようになった」と述べている。また、S4は大学院進学の際に専攻を変えたことで、研究室の他の学生と異なって専門知識の差を強く意識し、当初はそのギャップに悩んでいたが、「それを追い越すのは無理だとしても、自分なりに勉強していくしかない」と、他者との差を受け入れつつ、自分なりの努力の方向性を見出すようになった。そして、S8も来日初期は周囲の留学生より日本語能力が遥かに劣っていることに直面した際に、もっと日本語ができるようにならなければと自分に無理な期待をかけていたが、時間が経つにつれてそのような自己期待を手放し、英語を使ったり、実用的な日本語だけを覚えればいいといった現実的な自己調整を行うようになった。

これらの経験はいずれも、「比較—修正—自己受容」というプロセスが明確に働いていることを示している。とりわけ、この「社会的比較」そのものも、当事者の認知の中で変容し、修正していく。まず、「社会的比較」において当事者が想定する参照対象について見ると、多くの場合「規範的参照対象」(Runciman, 1966, p.11)として捉えられている。つまり、その参照対象は単に比較の基準を提供するだけであり、必ずしもその対象と直接比較したいという意図は薄いということである。そして、「社会的比較」において当事者が満たす必要のある基準そのものも変化している点が挙げられる。すなわち、「他人が持っているが自分にはない」から「他人が持っても自分にはないのは仕方ない」、あるいは「自分もそれを得たい、得るべきだ」という期待から、「期待値を下げて自分らしいやり方でやっていく」というように、相対的剥奪感を生じさせる条件自体が変化すると考えられる。それによって、社会的比較の直接的な結果としての相対的剥奪感が低下し、自己受容感が高まるという現象が見られるのである。

また、このような社会的比較に対する主体的な修正の中で、「自分の成長」や「折衷的・実用的な選択」といった、より「利己的」な傾向が顕著になってきている。例えば、S9は自身のフィールドワークの経験を挙げ、相手が自分よりも地位が上の場合、多少緊張はあるが、それでも「やるしかない」としてするようになったということである。それは「人付き合いや学びの一部」

と受け止めていると述べ、成長の機会として前向きに捉えている姿勢がうかがえる。また、S7は大学で2～3年にわたって継続的に行われる授業で多くの人の前で発表が続いたことについて、「正直、自分にとってはけっこうつらかった」と述べているが、「大学生活を有意義にしたい」とか「将来に役立てたい」という気持ちから、「面子を妥協してでも成長したいと思うようになった」と語る。

このように、当初は自分が不利な状況に置かれていることに対して緊張や苦痛を感じていたが、一方で「やるしかない」場面に直面しながら、心境を修正しながら、それを自己成長の糧としたり、自分の経験を有意義にしようとする主体的な姿勢が強まっている。

さらに、来日前は他人の美的感覚に合わせて外見を整えたり、高い服で自分を飾っていたのに対し、現在のS1やS10の語りからは、「自然と周囲に合わせて特に高価な格好はしなくなった」という外見に対する価値観の変化が読み取れる。S1もまた、来日前は奢ることが当然だったが、今では割り勘を自然に受け入れるようになっており、相手との対等関係を選ぶ傾向も見られる。

一方で、この時期の語りには、権力関係における面子重視の傾向も見られる。例えば、指導教員など目上の上位者との関係において、対象者はしばしばその権威に従い、公的な場でも慎重な行動を取る傾向があった。また、中国人全体のイメージ、すなわち集団面子を意識する場面も確認された。こうした、自己と上位者、自己と公的な場、自己と所属集団との間に成立する「権力関係」は、在日中国人留学生にある程度の影響を及ぼしている。

しかしながら、筆者はこのような権力関係下の面子重視行動を「相対的剥奪感」で説明することには難しいと考える。なぜなら、ここでの指導教員などの上位者、または公的手続きやルールの遵守が求められる公的場面は、在日中国人留学生が社会的比較を行う意味での参照対象ではなく、むしろ「評価者」、あるいは規範を決定する「管理者」として機能する存在だからである。在日中国人留学生は、これらの権力関係に対して順応することを通じて、リスクを避けて自己利益を守る合理的なストラテジーをとっていると言えよう。このような行動は、社会的比較に基づく相対的剥奪感というよりも、絶対的剥奪を避けるためとして位置づけるほうが適切かもしれない。

さらに、これらの権力関係において重要となる「重要他者」(陳, 1988, p.111)の存在も指摘できよう。重要他者は、単なる比較対象ではなく、評価を通じて当事

者の利益に直接的な影響を及ぼす存在であり、在日中国人留学生はその評価と規範にできるだけ合わせようとする傾向が見られる。したがって、このような文脈で見られる面子重視の行動は、社会的比較や相対的剥奪感という枠組みでは十分に説明できず、むしろ権力関係の中の重要他者から評価と規範への順応を通じたリスク回避や自己利益保全の合理的な策として理解することが妥当であると考えている。

以上のように、来日中期から現在にかけての在日中国人留学生においては、社会的比較のあり方には大きな変化が見られる。すなわち、「比較—修正—自己受容」という主体的修正プロセスを経て、自己受容の傾向が顕著になっており、社会的比較において当事者が想定する参照対象も多くの場合「規範的参照対象」(Runciman, 1966, p.11)として捉えられるようになった。すなわち、その参照対象は単に比較の基準を提供するだけであり、その対象と直接比較したいという意図は薄いということである。また、社会的比較の基準そのものも当事者の中で変化しており、その直接的な結果として相対的剥奪感も低下していく。一方で、権力関係下で面子を重視する態度や行動もある程度続いているが、これらは必ずしも社会的比較や相対的剥奪感によって生じるものではなく、むしろリスク回避や自己利益の保全という合理的な動機に基づくと言えよう。

3つの時期における相対的剥奪感の変化を整理すると、来日前は「比較—相対的剥奪感—同調」、来日初期は「比較—相対的剥奪感—文化的模倣」、そして来日中期以降は「比較—修正—自己受容」というプロセスへ推移している。客観的に見ると、参照対象そのもの、すなわち、各時期に在日中国人留学生が直面する他者、は大きく変化していない。つまり、内集団の他者であれ外集団の他者であれ、社会的比較の参照対象の範囲は一定している。しかし、変化したのは、在日中国人留学生自身が参照対象に与える主体的な意味づけや、社会的比較に対する受け止め方である。具体的には、第2節でも述べた Runciman (1966, p.10) の相対的剥奪感成立の4条件(何かを持っていない、他者が持っていると認識、自分も得たいと期待、その期待が実現可能と考える)に即して見ると、来日中期から現在にかけては、「他人が持っても自分にはないのは仕方ない」、「期待値を下げて自分らしいやり方でやる」といった反応に変容している。すなわち、社会的比較そのものへの意図や、比較後の自分の反応メカニズムを主体的に修正する方向に移行していることが特徴であると言えよう。

7 本研究の成果：文化変容を通じて見出された「顔面」論への新たな示唆と在日中国人留学生の「面子」の独自性

本研究は、文化変容研究の枠組み (Berry, 1992, p.81) に立脚し、「面子」を中心概念として据えながら、在日中国人留学生の文化変容プロセスにおける段階的変容プロセスの中で起こる具体的な出来事を手がかりとして、「面子」がいかんにして再構築されていくのかを分析してきた。また、胡 (1944) らの面子理論を基礎とし、それを発展させた翟 (1995, 2010) の「顔面」理論を分析視角として導入し、在日中国人留学生の文化変容プロセスにおいて「顔面」構造がどのように変遷したのか、さらに相対的剥奪感の視点から「面子」再構築のメカニズムを考察してきた。次に、本研究の成果を3点述べる。

1点目としては、文化変容を通じて「顔面」論に新たな示唆を提供した点である。翟 (1995) は、胡 (1944) らの一体化された「顔面」概念を見直し、儒家文化と現実文化のギャップから「臉」と「面子」の分裂が生じ、「面子」がより重視されるようになったと指摘している (翟, 1995, pp.221-224)。また、「顔面」は同質性から異質性へと変化し、「臉」と「面子」の有無を軸に、儒教の理想像、現実重視派、逸脱志向派、利益追求派という4つの人格類型が現れるとしている (翟, 2010, p.102)。

もっとも、翟 (1995, 2010) の分析は中華文化の枠組みで「顔面」の異質性に着目し、その分離が中国社会における人格タイプとして現れる点を論じたものである。それに異なり、本研究が扱ってきた「顔面」構造の変遷は、集団ではなく個人に着目し、中国社会の出身を持つ個人が、異文化環境に移行して文化変容を経験するという文脈において、その個人の意識や行動、さらにそれらを支える心理的メカニズムがどのように変化するのかを明らかにしようとするものである。既存理論を基盤としつつ、異文化文脈における「面子」再構築という視点から新たな示唆を提示した点が、本研究のオリジナリティである。

具体的には、本研究は来日前、来日初期、来日中期～現在という3つの時期において、「顔面」構造の変遷を明らかにした。すなわち、常に一致を求める同調型「顔面」構造から、一致を求めざるをえない異文化文脈下での自己保全型「顔面」構造、そして一致を求められず主体性を発揮する自立型「顔面」構造へと移行していく過程を発見した点である。図7に示している通りである。これは、前の先行研究が主に中日間の面子観の違いだけ (末田, 1993, 1998) といった横断的比較に着目し

てきたのに対し、第一に「顔面」構造という視点から「面子」の反応メカニズムを拡充した点、第二に一つの集団（在日中国人留学生）を対象に、彼らへの縦断的イ

ンタビュー調査を通じて各時期における面子意識やその行動を多面的に明らかにし、より具体的な知見を提示した点にもオリジナリティがあると言える。

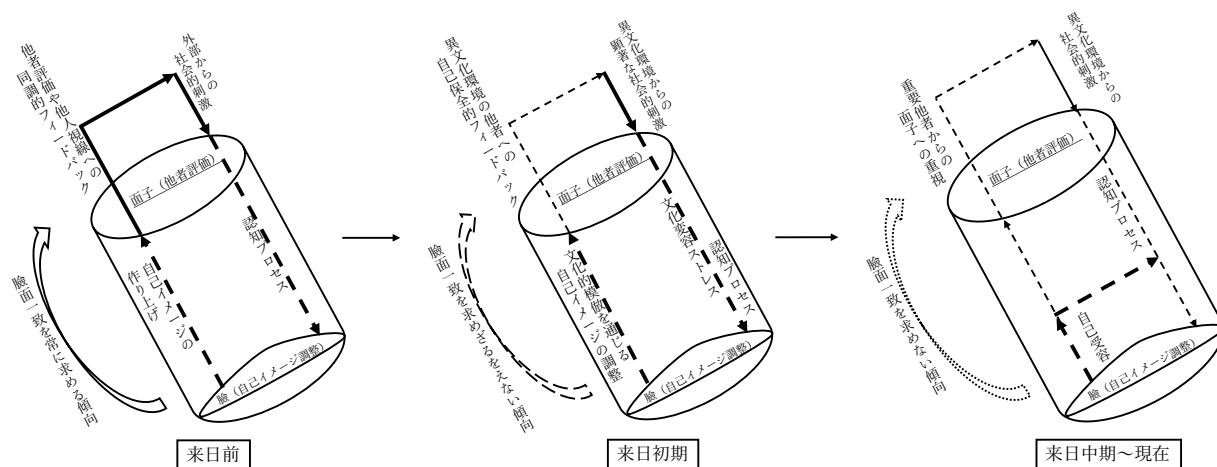


図7 3つの時期における「顔面」構造の変遷（筆者作成）

2点目としては、「面子」というものを通じて、在日中国人留学生の文化変容プロセスがいかに複雑であるかを明らかにした点である。具体的には、どの段階においても、在日中国人留学生は自己の出身文化と異文化、そして自己と異文化における他者との関係という二重の調整課題に直面している。先行研究で紹介した Berry (1997) の文化変容態度の4類型、すなわち統合・分離・同化・周辺化に関しても、本研究のインタビュー調査からは、各段階においてこれら4つの態度が単独で現れるのではなく、むしろ複合的に存在していることがうかがえた。

また、本研究では、特に来日中期から現在にかけて、多くの在日中国人留学生が「外国人である自分」をより積極的に受け入れ、ありのままの自分を受容し、異文化社会における他者の文化的期待に合わせることなく自分らしさを志向する傾向が見られた。これは、心理的な側面における「自己受容型」の文化変容態度と呼ぶことができよう。このような「自己受容型」の文化変容態度は、確かに在日中国人留学生の「適応」、特に「心理的適応」や「社会文化的適応」(Berry, 2005, p.709) の推進に寄与している。しかし、この適応は必ずしも同化や統合といった文化変容戦略によってもたらされたものではなく、むしろ異文化における他者の文化的期待に無理に合わせることをやめ、自分の内面を大切にするという点で、部分的には「分離」的な文化変容態度とも言える。このような傾向は Berry (1997) の論点とずれを持つ部分であり、また、主流社会が受容的な態度を示すかどうか以上に、「自分自身をどのように受け入れているか」という自己受容の態度が、個人の「文化変

容」やその結果としての「適応」にとって重要な役割を果たしている点も指摘できよう。

このことから、井上・伊藤 (1997) が主張した「統合」戦略が精神的健康に最も有利であるという見解については、再検討が必要であると考えられる。むしろ、本研究の結果からは、異文化環境における葛藤や挫折の経験を経て、それを基盤として自己を再構築した人ほど、より深いレベルで異文化環境に適応できる可能性が高いという点を示唆している。つまり、単なる統合や同化といった戦略以上に、「自己受容」といった個人の心理的適応、がより重要な役割を果たしている可能性を示唆している。

3点目としては、他の人々とは異なる「留学生」という集団、特に本研究の対象である「在日中国人留学生」における「面子」がいかなるものか、その独自性を探究した点である。本研究におけるインタビューデータからは、学部生や修士、博士といった学年や、1年半から13年にわたる滞在期間の幅広さにもかかわらず、多くの対象者が「他者評価」中心から「自己受容」中心への段階的な変容を経験していることが語られている。この点について筆者は、在日中国人留学生が来日後に辿るプロセスは、必ずしも全員が同一の性格傾向を持っているわけではないものの、多くの留学生が完全に同じではないが類似した段階的变化を共通して経験していると考えられる。つまり、個々の内的要因が異なるとはいえ、こうした共通する外的要因が、ある程度内的要因に影響を及ぼしているのである。したがって、「留学年数」や「学年」だけが面子意識の変容を決定するわけではなく、留学生個々人が経験する具体的な出来事やその時に置かれた状

況が複合的に影響していることが示唆された。

本研究では欧米諸国における中国人留学生の状況については扱っていないが、仮に欧米を比較対象とした場合、日本社会は欧米に比べて顕著な人種差別が少ないと言えよう。すなわち、欧米ではアジア人に対する顕著な差別や排外的な態度が常に指摘される一方で、日本では中国人留学生にとって比較的穏やかな受け入れ環境が存在している。しかし、そのような穏やかな受け入れ環境においても、目に見えにくい形の差別や排外的な態度、すなわち「隠れた差別」が存在しているのも事実である。このような平和だが隠れた差別が残る環境は、在日中国人留学生に対して、初期段階では積極的に日本社会の文化的期待に応えようとするポジティブな意図を生じさせる。しかし、その一方で、時間が経つとともに自分は本当にこの文化的期待に完全に適応すべきなのかという内省が促され、中期や後期には「外国人である自分」というアイデンティティを受け入れ、自己受容的な態度へ変化していく傾向が見られる。

そして、在日中国人留学生は他国からの留学生と比べて人数が多く (JASSO, 2025)、日本においても比較的容易に同国出身の友人を作ることができ、支えも多いような印象から、適応が進みやすいという印象を持たれやすい。しかし、本研究の当事者の経験からは、むしろ中国人留学生同士の間で社会的比較が強化される傾向が見られる。特に来日初期においては、適応状況がより良い同国留学生との比較によって、相対的剥奪感がより顕著に生じやすいという側面が明らかになった。

加えて、欧米の個人主義的文化と比較すると、中国や日本には集団主義や対人調和志向といった文化的共通性が存在する (Markus & Kitayama, 1991, pp.225-229)。本研究の当事者の経験からも、在日中国人留学生が来日前は「同調型」顔面構造、来日初期には「自己保全型」顔面構造を示していることが確認できており、いずれも集団主義や調和志向を重視する傾向が反映されていると言えよう。このような文化形態における共通性は、在日中国人留学生が文化変容の初期段階において現地文化への適応意欲を高める要因となる。一方で、共通性から外れる文化的差異の存在は、現地文化が在日中国人留学生に対して必ずしも十分な包容性を示さない要因にもなり得る。こうした矛盾の中で、在日中国人留学生は葛藤や挫折を経験し、その結果として自己調整を選択する傾向が見られる。

一方で、来日中期以降の在日中国人留学生は、こうした集団主義や調和志向を重視する傾向からある程度離れ、「自己受容」を重視する顔面観にシフトしている。

たとえ権力関係下において上位者との関係調和を重視する場面があっても、自己受容を優先する傾向が見られた。このような顔面観は、個人主義や集団主義といった従来の枠組みを超えて、文化価値観というより大きな枠組みの中で主体的な自己呈示モデルを示していると言えよう。こうした顔面観は、まさに在日中国人留学生の文化変容プロセスにおける顔面観の独自性として位置づけられるであろう。

今後の課題としては、まずサンプル数を増やすことや、量的調査を組み合わせることで研究の信頼性を高める必要がある。次に、本研究では留学生の来日前と来日後の状況について調査を行ったが、今後は帰国や日本での就職する、あるいは第三国への移動といった場合における文化変容プロセスや「面子」意識の変化についても、研究課題として検討する価値があると考えられる。

<参考文献>

- Arthur Smith, 1894, *Chinese Characteristics*, Fleming H. Revel Company, (= Arthur Smith, 2009, 王統然訳『中国人的性情』, 長征出版社, pp.7-9.)
- Aycan, Z., & Berry, J. W., 1996, Impact of employment-related experiences on immigrants' psychological well-being and adaptation to Canada, *Canadian Journal of Behavioral Science*, 28(3), pp.240-251.
- Berry, J. W., 1992, Acculturation and adaptation in a new society, *International migration*, 30, pp.69-85.
- Berry, J. W., David L Sam, 1997, Acculturation and adaptation, *Handbook of cross-cultural psychology*, 3(2), pp.291-326.
- Berry, J. W., 2003, Conceptual approaches to acculturation, In K. M. Chun, P. Balls Organista, & G. Marín (Eds.), *Acculturation: Advances in theory, measurement, and applied research*, American Psychological Association, pp.17-37.
- Berry, J. W., 2005, Acculturation: Living successfully in two cultures, *International Journal of Intercultural Relations*, 29(6), pp.697-712.
- Festinger, L., 1954, A Theory of Social Comparison Processes, *Human Relations*, 7(2), pp.117-140.
- Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E., 1963, An extension of the U-curve hypothesis, *Journal of Social Issues*, 19(3), pp.33-47.
- Graves, 1967, Psychological Acculturation in a Tri-Ethnic Community, *Southwestern Journal of Anthropology*, 23(4), pp.337-350.
- Gilbert, D. T., Giesler, R. B., & Morris, K. A., 1995, When

- comparisons arise, *Journal of Personality and Social Psychology*, 69(2), pp.227-236.
- Smith, H.J., Pettigrew, T.F., 2015, Advances in Relative Deprivation Theory and Research, *Social Justice Research*, Volume 28, pp.1-6.
- Lysgaard, S., 1955, Adjustment in a Foreign Society: Norwegian Fulbright Grantees Visiting the United States, *International Social Science Bulletin*, 7, pp.45-51.
- Markus, H. R., & Kitayama, S., 1991, Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation, *Psychological Review*, 98(2), pp.224-253.
- Redfield, Linton, & Herskovits, 1936, Memorandum for the Study of Acculturation, *American Anthropologist*, 38(1), pp.149-152.
- Runciman, W. G., 1966, *Relative deprivation and social justice: a study of attitudes to social inequality in twentieth-century England*, University of California Press, pp.9-35.
- The Social Science Research Council Summer Seminar on Acculturation, 1954, Acculturation: An Exploratory Formulation, *American Anthropologist*, 56(6), pp.973-1002.
- 陳向明, 2020, 『旅居者和‘外国人’—留美中国学生跨文化人際交往研究』, 教育科学出版社, pp.149-161.
- 陳之昭, 1988, 「面子理論の理論分析と實際研究」, 『中国社会心理学評論 第2輯』, 2006, 社会科学文献出版社, pp.107-160.
- 陳蕾、張佳靖, 2025, 「社会比較、相对剥夺感与随遷老人的社会融入—基于深圳市抽樣調查数据的分析」, 『社会政策研究』, pp.15-26.
- 独立行政法人日本学生支援機構, 2025, 「‘日本人学生の海外留学状況’及び‘外国人留学生の在籍状況調査’について」
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692_00003.htm
(最終閲覧日: 2025/08/01)
- 郭星華, 2001, 「城市居民相对剥夺感的实证研究」, 『中国人民大学学报』, 3, pp.71-78.
- 井上孝代、伊藤武彦, 1997, 「留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康」, 『心理学研究』, 68(4), pp.298-304.
- 胡先晋, 1944, 「中国人的臉面觀」, 『中国社会心理学評論 第2輯』, 2006, 社会科学文献出版社, pp.1-17.
- 黄光国, 2010, 『人情与面子: 中国人的權力遊戲』, 中国人民大学出版社, pp.1-44.
- 金耀基, 1988, 「‘面’‘耻’与中国人行為之分析」, 『中国社会心理学評論 第2輯』, 2006, 社会科学文献出版社, pp.48-64.
- 鲁迅, 2005, 「説‘面子’」, 『鲁迅全集』第六卷, 人民文学出版社, pp.130-133.
- 林語堂, 1994, 『中国人』, 学林出版社, pp.199-206.
- 末田清子, 1993, 「中国人が持つ面子の概念と日本人とのコミュニケーション」, 『年報社会学論集』, 6, pp.191-202.
- 末田清子, 1998, 「中国人学生と日本人学生の‘面子’の概念及びコミュニケーション・ストラテジーに関する比較の一事例研究」, 『社会心理学研究』, 13(2), pp.103-111.
- 中本進一, 2021, 「外国人人材の自己実現から見る日本社会の異文化受容力」, 『留学生交流・指導研究』, 23, pp.23-36.
- 許伝新, 2007, 「新生代農民工城市生活中的社会心態」, 『思想政治工作研究』, 10, pp.57-59.
- 熊猛、葉一舵, 2016, 「相对剥夺感: 概念、測量、影響因素及作用」, 『心理科学進展』, 24(3), pp.438-453.
- 趙師哲、田中共子, 2020, 「在日中国人の文化変容方略に関する探索的研究」, 『多文化關係学』, 17, pp.45-55.
- 周美伶、何有晖, 1992, 「从跨文化的觀點分析面子的內涵及其在社会交往中的運作」, 『中国社会心理学評論 第2輯』, 2006, 社会科学文献出版社, pp.186-216.
- 佐斌, 1997, 『中国人的臉与面子: 本土社会心理学探索』, 華中師範大学出版社, pp.104-115.
- 翟学偉, 1995, 「中国人臉面觀的同質性和異質性」, 『中国社会心理学評論 第2輯』, 2006, 社会科学文献出版社, pp.217-228.
- 翟学偉, 2010, 『中国人的臉面觀: 形式主義的心理動因与社会表徵』, 北京大学出版社.